

ポルトガル語版『聖杯の探索』における haver と ter について

Osamu Mizunuma

0. はじめに

本稿は、ポルトガル語の動詞'haver'と'ter'の、①「所有」を表す形式、②過去分詞を伴う形式、③「前置詞＋不定詞」を伴う形式に関し、ポルトガル語版『聖杯の探索』(*A Demanda do Santo Graal*)における使用と、これと前後する時代の諸テキストにおける使用とを比較し、この言語特徴が13世紀または15世紀のいずれの時代に相応するののかという点について検証を試みる。

1. ポルトガル語の'haver'と'ter'について

はじめに、現代ポルトガル語と中世ポルトガル語における'haver'と'ter'の使用について簡単に確認しておく。

1-1. 現代ポルトガル語

現代ポルトガル語では、「所有」を表す本動詞(1)及び「複合時制¹⁾」の助動詞(2)として、専ら'ter'(＜TENERE)が用いられる。

(1) A Ana **tem** uma casa grande. アナは大きな家を持っている。

(2) O Pedro **tinha** saído quando a Maria telefonou. マリアが電話した時、ペドロは外出中だった。

一方、'haver'(＜HABERE)は、「存在」(3)を表す形式²⁾や、「時間」(4)を表す形式で用いられることが多い。

(3) **Há** um jardim zoológico nesta cidade. この町には動物園がある。

(4) O Rui **tinha** concluído o curso **havia** uma semana. ルイはその課程を一週間前に修了していた。

また、'haver'及び'ter'は、「前置詞＋不定詞」を伴う形式でも使用される。特に「前置詞 de＋不定詞」を伴って使用される場合、前者は「義務・未来」(5)を、後者は「必要性・義務」(6)を表す(Mateus et al 2003, Costa 2010)。

(6) O que **hei-de** fazer? 私は何をすればよいのだろうか。

(7) Tu **tens** de comer mais. 君はもっと食べなければならない。

1-2. 中世ポルトガル語

俗ラテン語からの流れを引き継ぎ、'haver'と'ter'は、ポルトガル語の初期段階において、「所有」を表す動詞として用いられていたが、それぞれが表す意味、もしくは、それぞれが所有する「対象物」の種類に違いが見られた (Said Ali 1957, Chevalier 1977). 'haver'が比較的多くの種類の「所有対象物」と共起できるより一般的な動詞であったのに対し、'ter'は限られた文脈においてのみ「所有」を表す動詞として用いられたと考えられている (Mattos e Silva 1996, Costa 1999). 中世を通じて、「所有」を表す形式における'haver'の優勢が続いたが、徐々に'haver'と'ter'の交替が進められていった (Sampaio 1978, Ferreira 1981, Mattos e Silva 1996).

そして、「所有」を表す動詞としての'haver'の退却は、15世紀の半ば以降、徐々に顕著になっていった。また、これと並行して、「前置詞+不定詞」を伴う形式、過去分詞を伴う形式、「存在」を表す形式³における'haver'の使用頻度が時代の経過とともに高まっていく。しかしその後、これらの形式（「存在」を除く）においても'ter'が優位に立ち、現代語には、'haver'の使用は非常に限られたものとなっている。

2. *A Demanda do Santo Graal* について

次に、今回調査の対象とする *A Demanda do Santo Graal* の文献学的及び言語的特徴について概略を述べる。

A Demanda do Santo Graal (聖杯の探索) は、中世アーサー王文学後期散文作品群「Post-Vulgata」に属する *Quest del Saint Graal* のポルトガル語訳である。現存する写本 (Vienna ms.2594) は15世紀に作成されたとされているが、同作品がフランス語からポルトガル語に翻訳されたのは13世紀半ば(もしくは後半)であったと考えられている (Castro 1993)。なお、ポルトガル語版の他に、スペイン語版が存在し、両者のうちいずれが先行するかについて長らく議論が行われてきたが、現在では、ポルトガル語版をもとにスペイン語版が作られたとする説が有力である (Megale 2001)。

また、*A Demanda do Santo Graal* の言語特徴については、翻訳が行われた時代 (13世紀半ば) の特徴と、写本が作成された時代 (15世紀半ば) の特徴が共存することが、これまでの研究で明らかになっている (Castro 1993)。Lapa (1930) は、例えば、写本に散見される、現代語の mais にあたる chus (< plus) は、13世紀第3四半期には既に稀な語形であり、また、dei (< dedit) (直説法完了過去三人称単数形)、conquista (conquistar の過去分詞)、jaremos (jazer の直説法未来一人称単数形) など、写本が作成されたと推定されている時代には似つかわしくない動詞の活用形も確認されるため、同写本は、抒情詩最盛期 (13世紀) の言語と類似する特徴を有していると考えている。

なお、写本の作成にあたっては、少なくとも5人の写字生が関与したとされている (Bogdanow 1993)。本稿では、これら5人の写字生に便宜上 A～E の記号を付した。各写字生の担当箇所は以下のとおりである。また、下の表中の括弧にあたる部分については、写字生 D の担当と推定される箇所であるが、本稿ではこれについても、同写字生の担当箇所として扱うことにする。

写字生	担当箇所
A	fol. 1r – fol. 77r
B	fol. 78r – fol. 93v
C	fol. 94r – fol. 101v
D	fol. 102r – 110v, fol. 159r – 199v, (fol. 111r – fol. 134v)
E	fol. 135r – fol. 158v

次節では、*A Demanda do Santo Graal* の校定本である Nunes (2005) より抽出したデータをもとに、同テキストにおける 'haver' と 'ter' の使用実態を観察し、他の研究の調査結果との比較を通じ、この言語特徴の考察を行う。その際、写字生間に見られる差異についても、できる限り考慮の対象とすることとしたい。

3. *A Demanda do Santo Graal* における 'haver' と 'ter'

他の中世語テキスト同様、*A Demanda do Santo Graal* においても、'haver' と 'ter' は「所有」表現で使用される例が最も多く、全体の半数近くを占めている (全 2370 例中 1182 例)。「所有」表現以外の使用例としては、'haver' は「存在」(390 例)、「+過去分詞」(228 例)、「+不定詞」⁴ (201 例)、'ter' は、「+過去分詞」(21 例)、「+不定詞」(3 例) となっている。

表 1. *A Demanda do Santo Graal* における 'haver' と 'ter' の生起数

	haver	ter	合計
「所有」	1020	162	1182
「+過去分詞」	228	21	249
「+不定詞」	201	3	204
「存在」 ⁵	390	1※	391
その他	145	156	301
合計	1984	344	2327

表 1. が示す通り、*A Demanda do Santo Graal* では、今回調査の対象とした項目である「所有」、「+過去分詞」、「+不定詞」において、'haver' の生起数が、'ter' を生起数を上回っている。

なお、上の表で「その他」に分類されたものとしては、'ter' が直接目的語及び「前置詞 por + 名詞」を伴う構文⁶ (8) や、'haver' が数字等の名詞を伴い「時間」を表す構文 (9) があげられる。本稿で

は、上述の調査項目を分析対象とするため、これらは扱わないこととするが、例数の多さに鑑み（全 2327 中 301 例。'ter'については、全 344 中 156 例.）、今後の課題としたい。

(8) que me **tenham** por bo~o~ cavaleiro (fol.169r) 私を良い騎士と見なすことを、

(9) ca muito **havia** que se nom virom. (fol.163v) 長い間会っていなかったの

3-1. 所有表現

ポルトガル語の所有表現における'haver'と'ter'の交替について言及した研究は比較的多いものの、数量化されたデータをもとにこの交替のプロセスを論じたものはあまり多くない。

複数のテキストからなる資料体を用いた研究としては、Mattos e Silva (1996) がある。ポルトガル語の所有表現における'haver'と'ter'の歴史的推移を調査した Mattos e Silva (1996) は、これらの動詞の目的語にあたる「所有対象物」を3つのカテゴリー（下を参照）に分類し、それぞれのカテゴリーごとに、'haver'と'ter'の交替が行われた時期の推定を試みている。

AM (bens adquiríveis materiais: 獲得可能な物質)

例: pan パン, remédio 薬, horto 菜園, casa 家, etc.

AI (bens ou qualidades adquiríveis imateriais: 獲得可能な非物質, または, 性質)

例: fé 信仰, graça 恩恵, poder 権力, medo 恐れ, etc.

QI (qualidade inerente, não transferível, do possuidor: 譲渡不可能, 且つ, 所有者と不可分な性質)

例: barva 髭, cegueira 盲目, idade 年齢, etc.

(Mattos e Silva 1996)

本節では、同研究の調査結果をもとに、*A Demanda do Santo Graal* における「所有表現」が、どの時代の特徴に類似するかについて考察を行うこととしたい。

表 2. は、*A Demanda do Santo Graal* に見られる'haver'と'ter'の「所有表現」に関し、Mattos e Silva (1996) に倣い、「所有対象物」を上記の三つのカテゴリーに分類し、各カテゴリーにおける両動詞の分布を示したものである。

表 2. *A Demanda do Santo Graal* における「所有表現」

	haver	ter
AI	872 (94.2%)	54 (5.8%)
AM	135 (57.4%)	100 (42.6%)
QI	13 (61.9%)	8 (38.1%)
合計	1020 (86.3%)	162 (13.7%)

<主な例>

AM: 'haver'; cavaleiro 騎士, escudo 盾, reino 王国, etc.,

'ter'; espada 剣, terra 土地, carta 手紙, etc.

- AI: 'haver'; pesar 苦しみ, honra 名誉, ledice (lidice, lediça) 喜び, etc.,
'ter'; maravilha 驚き, promessa 約束, vontade 意志, rogo 請願, etc.
- QI: 'haver'; rosto 顔, olho 目, etc.,
'ter'; alma 魂, corpo 肉体, etc.

表 2. から分かったとおり、同テキストでは、全てのカテゴリー (AI, AM, QI) において、'haver' の生起数が 'ter' に対して優勢となっている。しかし、その生起数の割合は、各カテゴリーで異なる数字を示している。

前述の Mattos e Silva (1996) によると、13 世紀初頭から 15 世紀後半の間に起ったと考えられる、各カテゴリーにおける 'haver' と 'ter' の交替の推移は、以下の通りである。

	haver			ter			
	QI	AI	AM	QI	AI	AM	
13 世紀初頭 (<i>Testamento de Afonso II</i>)	+	+	+	∅	∅	-	AM で揺れが見られる (haver が優勢)
13 世紀～14 世紀 (<i>Foro Real</i>)	+	+	+	∅	-	-	AM と AI で揺れが見られる (haver が優勢)
14 世紀/15 世紀初頭 (<i>Diálogos de São Gregório</i> (a <i>Lenda do Rei Rodrigo</i>))	+	+	-	∅	-	+	AM と AI で揺れが見られる (AM では ter が優勢)
15 世紀前半 (<i>Crônica de D. Pedro</i>)	+	+	-	-	-	+	全ての領域で揺れが見られる (AM では ter が優勢)
15 世紀後半 (<i>Imitação de Cristo</i>)	-	-	-	+	+	+	全ての領域で揺れが見られる (ter が優勢)
1500 年 (a <i>Carta de Pero Vaz de Caminha</i>)	∅	-	-	+	+	+	AI で揺れが見られる (ter が優勢)

(Mattos e Silva 1996)⁸

ポルトガル語の初期文献の一つに挙げられる *Testamento de Afonso II* (13 世紀初頭) では、全てのカテゴリーで、'haver' が 'ter' に対して優位に立っており、'ter' が AI または QI に分類される「対象物」を所有する例は確認されない。'ter' に対する 'haver' の優勢は、*Foro Real* (13 世紀～14 世紀) においても観察されるが、14 世紀後半～15 世紀初頭のテキスト (*Diálogos de São Gregório, a Lenda do Rei Rodrigo*) では、AM を所有する動詞として、'ter' が 'haver' に対して優勢となる。その後 15 世紀を通じて、所有表現における 'ter' の使用例が数を伸ばし、15 世紀後半のテキスト (*Imitação de Cristo*) では、AM に加え、AI を所有する表現においても優勢となり、*A Carta de Pero Vaz de Caminha* (1500 年) では、全てのカテゴリーにおいて、'ter' が 'haver' の生起数を上回る結果となっている。

前述のとおり、*A Demanda do Santo Graal* では、全てのカテゴリーで、'ter' に対する 'haver' の優勢が確認できるものの、AM においては、他の二つのカテゴリーに比べ、'haver' の優位は顕著ではない ('haver': 57.4%, 'ter': 42.6%)。これを Mattos e Silva (1996) の調査結果に照らし合わせて考えると、*A Demanda do Santo Graal* に見られる 'haver' と 'ter' の分布は、13 世紀～14 世紀に見られる傾向と類似していると判断できるのではないだろうか。ただし、Mattos e Silva (1996) のコーパスでは、'ter' と QI

の共起が見られるようになるのは 15 世紀前半になってからであるのに対し、このような例は *A Demanda do Santo Graal* において 8 例確認される。しかしながら、これが 15 世紀の特徴を反映している可能性を検証するためには、大規模資料体を用いた、'haver' と 'ter' の交替のプロセスの全貌を明らかにする調査を待たねばならないであろう。⁹

また、表 2. で見られた 'haver' と 'ter' の分布を、写生字ごとに分類したものが、表 3. である。

表 3. *A Demanda do Santo Graal* における「所有表現」(写生字ごと)

	写生字 A		写生字 B		写生字 C		写生字 D		写生字 E		全体	
	haver	ter	haver	ter	haver	ter	haver	ter	haver	ter	haver	ter
AI	244 (94.6%)	14 (5.4%)	37 (94.9%)	2 (5.1%)	40 (95.2%)	2 (4.8%)	469 (93.8%)	31 (6.2%)	82 (94.3%)	5 (5.7%)	872 (94.2%)	54 (5.8%)
AM	43 (59.7%)	29 (40.3%)	8 (61.5%)	5 (38.5%)	2 (22.2%)	7 (77.8%)	64 (57.7%)	47 (42.3%)	19 (61.3%)	12 (38.7%)	135 (57.4%)	100 (42.6%)
QI	4 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (100%)	7 (58.3%)	5 (41.7%)	2 (100%)	0 (0%)	13 (61.9%)	8 (38.1%)
全体	291 (86.9%)	43 (86.5%)	45 (86.5%)	7 (13.5%)	42 (79.2%)	11 (20.8%)	540 (86.7%)	83 (13.3%)	103 (85.8%)	17 (14.2%)	1020 (86.3%)	162 (13.7%)
	334		52		53		623		120		1182	

この表から、AI を「所有する」動詞としては、いずれの写生字も 'haver' を多く選択していることが確認できる。AM についても、写生字 C を除く全ての写生字において、'ter' よりも 'haver' を多く用いる傾向が見られる。また、QI については、全ての写生字で 'ter' の使用が確認されるわけではなく、このような使用例が見られるのは、写生字 C 及び D のみである。

3-2. 過去分詞を伴う形式

ポルトガル語は、他のロマンス諸語同様、ラテン語の「HABERE+過去分詞」の形式を受け継ぎ、これを複合時制形式として発展させた。前述のとおり、この形式においても、歴史の中で 'ter' が 'haver' に取って代わる形となった。様々な意見はあるものの、複合時制の助動詞としての 'haver' と 'ter' の交替の時期については、概ね 15 世紀～17 世紀に位置付ける研究者が多い (Osório 2008)。「中世ポルトガル語電子化コーパス (*Corpus Informatizado do Portugues Medieval*)」に収録されている 14 世紀及び 15 世紀の文学テキストを調べてみると、この時代が、交替のプロセスの移行期にあったことがわかる (水沼 2006)。

*Corpus Informatizado do Portugues Medieval (CIPM)*¹⁰

「'haver'/'ter'+過去分詞」の生起数

	14 世紀	15 世紀
--	-------	-------

作品	PP	CAXL	CAXP	CGE	LC	LEBC	OE	CP	ZPM
haver	379	11	14	949	27	12	52	17	10
ter	21	6	13	50	42	29	27	9	112
計	400	17	27	999	69	41	79	26	122

過去分詞と目的語の性数一致

一致あり	165	9	8	460	24	17	47	15	60
一致なし	34	3	4	58	2	1	2	0	7

表 4. は、*A Demanda do Santo Graal* における「'haver'/'ter'+過去分詞」の生起数、及び、直接目的語と過去分詞の性数一致の有無について、写生字ごとの数値を示したものである。

表 4. 「'haver'/'ter'+過去分詞」(*A Demanda do Santo Graal*)

写生字 A		写生字 B		写生字 C		写生字 D		写生字 E		全体		
haver	ter	haver	ter	haver	ter	haver	ter	haver	ter	haver	ter	
76 (95.0%)	4 (5.0%)	11 (78.6%)	3 (21.4%)	8 (100%)	0 (0%)	116 (90.3%)	11 (9.7%)	16 (84.2%)	3 (15.8%)	227 (91.5%)	21 (8.5%)	
80		14		8		127		19		248		
一致あり	22 (95.7%)	2 (100%)	6 (100%)	2 (100%)	3 (100%)	0 (0%)	39 (91.2%)	7 (100%)	8 (100%)	2 (100%)	78 (92.3%)	13 (100%)
一致なし	1 (4.3%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	5 (8.8%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	6 (7.6%)	0 (0%)

A Demanda do Santo Graal のテキスト全体における「'haver'+過去分詞」(91.5%)と「'ter'+過去分詞」(8.5%)の生起数の分布を見れば、*CIPM*における14世紀のテキスト(*PP*や*CGE*)で見られる傾向に近いと考えることができるかもしれない。一方、過去分詞と目的語の性数一致については、*CIPM*のテキストに関しても、14世紀から15世紀にかけて、目立った変化が確認できないため、*A Demanda do Santo Graal*の特徴が、いずれの時代の特徴に類似しているのかを判断するのは難しい。

また、「'ter'+過去分詞」に対し「'haver'+過去分詞」が優勢という傾向は、いずれの写生字においても等しく観察される。しかし、直接目的語と過去分詞の間で性数一致が見られない例は、全て'haver'の形式のものであり、このような例が確認されたのは、写生字 A (1例)と写生字 D (5例)においてのみであった。

3-3. 「前置詞+不定詞」を伴う形式

「所有」を表す動詞としての地位を徐々に'ter'に奪われていく一方で、'haver'は、過去分詞や「前置詞+不定詞」を伴う形式で使用される機会が増えていった。例えば、Mattos e Silva (1989)の調査では、14世紀のテキストでは、「'haver'+de+不定詞」が頻繁に用いられているのに対し、「'ter'+de+不定詞」の使用は確認されていない。このように、13世紀~16世紀において、この形式における'ter'

は、'haver'に対して常に劣勢であったと考えられている (Costa 2010). Said Ali (1957) によれば、「'ter' + de + 不定詞」が本格的に導入されるのは、18世紀になってからであるという。

表 5. 「+不定詞」 (*A Demanda do Santo Graal*)

	写生字 A		写生字 B		写生字 C		写生字 D		写生字 E		合計	
	haver	ter	haver	ter	haver	ter	haver	ter	haver	ter	haver	ter
de + inf.	60	1	9	0	5	0	53	1	10	0	137	2
a + inf.	7	0	1	0	2	0	27	0	5	0	42	0
que + inf.	1	0	1	0	0	0	5	1	1	0	8	1
+ inf.	5	0	1	0	1	0	5	0	2	0	14	0
計	73	1	12	0	8	0	90	2	18	0	201	3
	74		12		8		92		18		204	

A Demanda do Santo Graal においても、このような形式における'haver'の生起数 (137 例) は、'ter'の生起数 (7 例) を大きく上回っている。写生字ごとに見てみると、'haver'の例は、全ての写生字による使用が確認されるのに対し、'ter'が「前置詞+不定詞」を伴う例が確認されたのは、写生字 A (1 例) と写生字 D (2 例) においてのみであった。それぞれの写生字が担当する分量に大きな差異があるものの、前節で見られた傾向を考慮すると、これら二人の写生字は、他の写生字に比べ、より改新的な性格を有していると推測できるかもしれない。

4. 結論

本稿で行った考察の主な結果は以下のとおりである。

- 「所有」を表す本動詞としては、'haver'が'ter'を生起数で上回る。一部の写生字で、部分的に'ter'が高い値を示す項目も見られるが、全体的に見れば、'haver'と'ter'の分布は、14世紀以前の傾向に類似すると判断するのが妥当と考えられる。
- 過去分詞を伴う形式においても、'haver'と'ter'の分布は、14世紀以前の傾向に類似すると考えられる。性数一致に関しても、15世紀の言語特徴に相応するとは断定できない。
- 不定詞を伴う形式や、「存在」を表す形式については、'ter'に対する'haver'の優勢を確認できるが、13世紀または15世紀のいずれの特徴に類似するかは判断しがたい。

A Demanda do Santo Graal における'haver'と'ter'の使用を、Mattos e Silva (1996) や水沼 (2006) の調査結果と照らし合わせると、この言語特徴についても、概ね13世紀に見られた傾向に類似すると考えることができるであろう。しかしながら、対照する元となったデータはいずれも小規模であるため、本研究で断定的な結論を導き出すのは困難と考える。ポルトガル語史におけるこの分野の研究が進め

られることで、より詳細な調査が可能になるであろう。

また、本稿では、写字生 A 及び写字生 D が、他の写字生に比べ、より改新的な性格を有している可能性についても言及した。この点に関しても、*A Demanda do Santo Graal* の他の言語特徴における写字生の傾向が調査されることで、今回の調査結果との比較が可能となり、各写字生が持つ言語的特徴がより明らかになるかもしれない。本研究を発展させる上での今後の課題としては、以下が考えられるであろう。

- 本研究で「その他」に分類された例の扱いの検討
- 「所有されるもの」の分類方法の再検討
- *A Demanda do Santo Graal* の他の言語特徴との比較
- 各写字生の特徴の記述

¹ 本稿では、'ter'または'haver'が過去分詞を伴う時制形式を「複合時制」として扱う。なお、現代ポルトガル語の書き言葉においては、いくつかの複合時制（直説法過去完了等）において、'ter'以外に'haver'が使用されることがある。

² ブラジルの口語では、「存在」を表す本動詞としては、'haver'ではなく'ter'を用いるのが一般的となっている。（Said Ali 1957, Mattos e Silva 1996）

³ それまでは、「存在」を表す本動詞としては、ser 及び estar が用いられていた。（Mattos e Silva 1989）

⁴ 「+不定詞」に分類されたものには、「前置詞+不定詞」を伴うものも含む。

⁵ 古典ラテン語において「所有」を表す動詞であった'HABERE'は、4世紀及び5世紀の俗ラテン語において「存在」を表す形式でも用いられた（Grandgent 1952）。Mattos e Silva（2002）によれば、ポルトガル語においては、16世紀のテキストに、'ter'が「存在」を表していると考えられるケースが散見される。

例：... em Perseo antigo Ormuz: onde tinha hu-a cidade deste nome que nos tempos passados foy tã celebre que Ptolomeu...
（*Ásia de João de Barros. Década Segunda*, 48, 36-49, 1）...そこには、かつて Ptolomeu ほどに有名であった町が存在していた。

A Demanda do Santo Graal では、次の曖昧な例を除き、'ter'が「存在」を表していると明確に判断できる例は確認されなかった。

se taes quatro cavaleiros como vós tevesse em campo, (fol.25r) あなたのような騎士が4名戦場にいた(?)のなら、

⁶ 3.で採り上げる Mattos e Silva（1996）においても、このような例は考察の対象からはずれている。

⁷ ここで挙げた例は、'haver'とだけ共起するもの、'ter'とだけ共起するもの、両者と共起が見られるものも含む。

⁸ 一方の生起数に対してもう一方の生起数が多い場合は+、少ない場合は-、生起例が確認できない場合はØで表記している。

⁹ 'ter'がQIを「所有」する例については、13世紀のテキストにおいて確認できるとする研究者もいる（Costa 1999, Osório 2004）。

¹⁰ 各作品の略号については、参考文献を参照されたい。

参考文献

- Bogdanow, Fanni, (1993), *La version post-vulgate de la Queste del Saint Graal et de la Mort Artu : troisième partie du Roman du Graal*, t.1., Paris, Société des anciens textes français.
- Castro, Ivo, (1993), "A Demanda do Santo Graal", in: Giuseppe Tavani e Giulia Lanciani (org.), *Dicionário da Literatura Medieval Galega e Portuguesa*, Lisboa, Editorial Caminho.
- Chevalier, Jean-Claude, (1977), De l'opposition <aver> - <tener>. *Cahiers de Linguistique Hispanique Médiévale*, n.º2.
- Costa, Maria João, (1999), A variação "aver"/ "teer" em estruturas de posse no português arcaico, *Actas do XV Encontro Nacional da APL*.
- , (2010). Os verbos "aver" e "teer" no português arcaico – breve sinopse, *Filologia e Linguística Portuguesa*, n.12(1).
- Grandgent, C. H., (1952), *Introducción al latín vulgar*, Madrid, C.S.I.C.
- Ferreira, José de Azevedo, (1981), Les verbes haber-tener et l'emploi de l'anaphorique y dans le <Libro de los Gatos>, *Boletim de Filologia*, tomo XXVI.
- Lapa, Rodrigues, (1930), *A "Demanda do Santo Graal" – Prioridade do texto português*, Lisboa, [s.n.].
- Mateus, M.H.M., A.M.Brito, I.Duarte e I.H.Faria., (2003), *Gramática da Língua Portuguesa*, 5ª edição, Lisboa, Caminho.
- Mattos e Silva, Rosa Virgínia, (1989), *Estruturas Trecentistas. Elementos para uma gramática do português arcaico*, Lisboa, INCM.
- , (1996), *A variação "haver"/ "ter". A carta de Caminha. Testemunho linguístico de 1500*, Salvador, EDUFBA.
- , (2002), Vitórias de ter sobre haver nos meados do século XVI: usos e teorias em João de Barros, in: Mattos e Silva, R. V., Machado Filho, A. V. L., (orgs.), *O português quinhentista: estudos lingüísticos*, Salvador, EDUFBA/UEFS, pp.119-142.
- Megale, Heitor, (2001), *A Demanda do Santo Graal, das origens ao código português*, São Paulo, Ateliê.
- Osório, Paulo. (2004). *Contributos para uma caracterização sintáctico-semântica do português arcaico médio*, Covilhã, Universidade da Beira Interior.
- Said Ali, Manuel, (1957), *Dificuldades da língua portuguesa. Estudos e observações*, 5ª edição, Rio de Janeiro, Livraria Académica.
- Sampaio, Maria Lúcia Pinheiro, (1978), *Estudo diacrónico dos verbos TER e HAVER, duas formas em concorrência*, São Paulo, Assis.
- Silva, Jaime Ferreira da., Osório, Paulo, (2008), *Introdução a História da Língua Portuguesa*, Lisboa, Edições Cosmos.
- 水沼修, 2006 「ポルトガル語の複合時制の発展について—13世紀, 14世紀, 15世紀のテキストから—」, 東京外国語大学大学院地域文化研究科修士論文

資料体

Irene Freire Nunes, *A Demanda do Santo Graal*, Lisboa, INCM, 2005.

Corpus Informatizado do Português Medieval

- PP – Afonso X, *Primeyra Partida* (1350?)
- CAXL – *Crónica de Afonso X (Ms L) in Crónica Geral de Espanha de 1344*
- CAXP – *Crónica de Afonso X (Ms P) in Crónica Geral de Espanha de 1344*
- CGE – *Crónica Geral de Espanha de 1344*
- LC – *Leal Conselheiro* (1433/1438?)
- LEBC – *Livro da Ensinança de Bem Cavalgar Toda Sela* (1437/1438?)
- OE – *Orto do Esposo*
- CP – *Castelo Perigoso*
- ZPM – *Crónica do Conde D. Pedro de Meneses*